

映像アーカイブズ

村尾 静二 葉山高等研究センター
平田 光司 葉山高等研究センター

「大学共同利用機関の歴史とアーカイブズ」では映像についても積極的に検討してきた[1-6]。これには既存の映像をアーカイブズとして保存、公開する面だけでなく、現在の状況を映像として残すことも含まれている。本課題の中での映像アーカイブズの達成状況と、明らかになった問題点を概括する。

非文書資料のアーカイブズ

科学者は自分のことは語らない、記録も残さない、研究の現場から退いても論文さえ残ればよい、というスタイルを好むようで、これは伝統的なスタイルとして定着している。最近では変わりつつあるようだが、論文では主語に We を使う。これは著者が一人のときでもそうで、We とは筆者と読者であるということである。受け身の表現が多用されるのも同じ理由であり、科学論文というものは、抽象的な科学者が普遍的な考察を行うもので、非人間的なものだ。実際の科学研究の現場は、それとは相当異なることは皆さん承知しているわけだが、たてまえとしてはそうなっている。

研究の成果を重視するなら、論文だけあれば十分であろう。しかし、学術史という、より広い視点から研究を捉えるなら、実験の手法や装置の詳細もまた重要なデータである。論文だけでは分からないことも多くあり、映像記録が重要となる。さらに、科学者がどのような環境（人的、社会的、物理的）で働いていたか、その風景ということも重要であろう。同僚との

第1章 基盤機関アーカイブズの構築

意見交換が容易な環境（机がとなりあっている）だったか、個室で黙々と研究していたか、などは研究が生みだされた経緯を調べる上でも貴重な情報であろう。つまり、科学者が日常的に研究活動を営んできた場所の記録ということで、これには映像が大きな寄与をする。研究会で拝見した南極観測の古い記録映像（極地研提供）などからは、文書から読み解くことが困難な多くの情報が得られる。

この意味では映像のみでなく、写真、音声（録音テープなど）、スケッチなども重要な記録であり、現時点での記憶をインタビューなどで残すことも重要である。ここでは映像を中心に考えるが、写真や録音テープでも同じように考えられる。

映像アーカイブズの3要素

「残す」という観点からは、物理的保存（保存）、資料的保存（整理）、アーカイブズの保存（公開）の3つの側面がある。ただし、これらの名称は暫定的なものである。

保存：物理的保存とはまさしく物としての保存である。フィルムは映像の保存において最も劣化の少ないメディアであるといわれているが、フィルム保管庫のなかで適度の温度・湿度で保存しなければ劣化してしまう。映像をデジタル化してコンピュータ（ハードディスク）に保存することも可能だが、例えばCD-ROMの寿命はフィルムより短く、物理的保存には向かないことが次第に明らかになってきた。また、デジタル化の手法は統一されておらず、技術の変化も激しいために、特定の機関で定期的にバージョンアップしていかないと、いずれ読めなくなる。これはデジタルアーカイブズの一般的な問題である。この点に関しての検討は、本課題の中では十分できなかった。

整理：資料的保存とは資料を整理し、検索を可能とすることである。メタデータを作ることに尽きる。古い映像であれば、何が映っているか、誰が映っているか、いつ撮影が行われたのかなどをできるだけ詳しく調べ、記録しておく必要がある。これは往々にして難しい作業である。しかし、あらたに映像を作成する場合には、最初からアーカイブすることを考慮しておけば、十分な対応ができる。後述するように、この点に関しては本課題で一定の成果があがったと言える。このようなアーカイブズリテラシーは今後、研究一般でも必要となるものだ。（事務文書を含め、すべての文書には作成者、文書の目的、日付を入れることを習慣とする、など。実験のログブック作成と同じことである。）

公開：アーカイブズの保存とは、これらの資料を研究などに役立てるための公開システムを構築することである。極地研ではDVDを一般に貸し出しているが、このシステムはすべての大学共同利用機関で利用できるのではないかと思われる。映像に関して言えば、記録されたすべての映像が何らかの意味で公開されており、研究目的のため、また広報のために利用できることが望ましい。このためには資料的保存が体系的に行われていることが前提となる。この他に映像の編集権、上映権などを研究機関がきちんと所有する、少なくとも把握しておく必要がある。

資料的保存は物理的保存を前提とし、アーカイブズの保存は資料的保存を前提とする。

アーカイブズ映像の作成とアーカイブズ

「映像アーカイブズ」には2重の意味がある。

- (A) 研究などを映像として記録する
- (B) 映像をアーカイブ（保存、整理、公開）する

第1章 基盤機関アーカイブズの構築

当然 (A) のあとには (B) が続くべきである。また (A) の後には (C) 作品を作る、こともあり得る。

「大学共同利用機関の歴史」で作成した KEK やカミオカンデ、CERN[1-4]、極地研の記録映像[7]は (A) にあたる。これらの映像はそれぞれ編集され作品『宇宙の始まりの実験』『学術映像アーカイブズ 国立極地研究所—板橋時代の記録』となっているが、これが (C) にあたる。しかし、作品に使われなかった映像も多く、それらを含めてアーカイブしておくことが (B) にあたる。このように、自分たちで撮った映像は資料的整理のためのデータも豊富であり、模範的な形で整理することが可能である。作品には使われなかった映像も、資料としての利用だけでなく、広報のための映像を含め、他の人が他の作品に利用することもあり得るわけで、このような利用のための公開制度を整備していくことも、今後のアーカイブズの課題であると言える。

「学術映像アーカイブズ 国立極地研究所—板橋時代の記録」の製作ではアーカイブズを考慮した。くわしくは文献[7]を参照していただきたいが、考慮したのは以下の点である。

- (1) 映像はすべて音声のテープ起しを行い（これは映像作成ではほとんど常に行われる）、それを保存する。これを映像ファイルと組にして保存する。この方式は平田が映像制作会社「エスパ」のかたの意見を参考に提案したものである。
- (2) 出演者は多岐にわたるので、映像を2次使用する度に再度協議することは難しい。2次使用についての権限は研究所の所長もしくは広報部門に委譲することをすべての出演者に依頼し書類として残した。こうしておけば、将来、映像を様々な用途で2次使用する際、個々の出演者と再度協議する手間を省くことができ、権利の所在が明確になる。この方式は横山による（文献[3]）。

映像作成を始める時点でこれらのことを計画の中に入れておく必要がある。

映像アーカイブズの課題

「映像アーカイブズ」には2重の意味があったが、まず、(A) 映像記録を残すという点の課題がある。映像の作成は外部のプロダクションなどに発注するのではなく、研究者が自分たちで撮影するのが望ましい。これはその映像を自由に利用するためには必須である。外注する場合にも、映像の編集権を確保しておけば良いが、何かと煩わしいところがある。

「生物学の分野ではすでに、新たに開発された実験手法を共有する為のビデオ形式の論文ジャーナル JoVE が存在している」[8]。JoVE (Journal of Visualized Experiments) は、特に実験の手法を伝えるものである。生命系の研究者にとっては映像を作る能力は必須のものとなってくる可能性がある。

映像の作成は以前にくらべ、格段に容易になっている。デジタルビデオカメラが安く手に入るようになり、例えば初歩的な映像編集ソフト iMovie は Mac にあらかじめインストールされている。映像によるアーカイブズをはじめて試みるには、これで十分と思われる。撮影と編集に関する基本的な技術に加え、映像の公開を前提とするなら、映像倫理に関する基本的な知識（他人の肖像権をおかさない、著作権で保護されているものを使わない、など）も必要となる。

これらの記録を、アーカイブズとして保存する(B)については、すでにあげた物理的保存の問題があり、これはまだ十分に検討されていない。著作権を守ることは難しいものの、YouTubeなどでウェブ公開してしまえば、コピーがたくさん出回ることによって半永久的に保存される、という可能性もある。JoVE などにおかれた映像は、この点、かなり安心できる。

第1章 基盤機関アーカイブズの構築

資料的保存については、今回報告した映像と書起しをセットで保存する方式は有効と思われるが、例えば植物の成長の映像などには使えない。どうしてもメタレベルのデータが必要となる。これらのEADフォーマットは今後、開拓していく必要がある。(何が映っているか、だけでなく、どのような条件で撮影したかも必要。)

アーカイブズの保存ということでは、極地研で行っているようなDVDの貸し出しのシステムが有効と思われる。この点は基盤機関の史料室等に検討をお願いしたい。

文献

- [1]横山広美「科学アーカイブズ撮影報告」共同利用機関とアーカイブズ 2005、pp119-125(2007)
- [2]大森康宏「映像アーカイブズについて」共同利用機関とアーカイブズ 2005、pp. 127-131(2007)
- [3]大森康宏、横山広美「基盤期間における科学映像作成」共同利用機関とアーカイブズ 2006、pp. 25-33(2008)
- [4]大森康宏「大学共同利用機関の科学映像」共同利用機関とアーカイブズ 2007、pp. 61-71(2008)
- [5]神田啓史「板橋時代の国立極地研究所の映像記録について」共同利用機関とアーカイブズ 2008、pp. 53-66(2008)
- [6]平田光司「オーラルヒストリーと映像-非文書資料」共同利用機関とアーカイブズ 2008、pp. 161-179(2008)
- [7]村尾静二「学術映像の研究と実践 - 制作過程の構造化に向けて」科学におけるコミュニケーション 2009
- [8]倉田智子「生物学分野学術論文の映像化の試み」科学におけるコミュニケーション 2009